1. Frank talks between an adolescent and his parents often reveal that the adolescent is basically willing to rely on his parents for protection in many situations.

（日本大）

《語句》 frank:率直な
adolescent:①[名詞](10代の)若者
②[形容詞]思春期の
be willing to do[慣]～:(自ら)進んで～する
rely on A for B: Bのことで Aをあてにする(Aに頼る)
protection:保護

【解答＆解説】

読解の基本はやはり「ＳとＶの決定」です。この英文ですが、Frank talks を「フランクは話す」等としてしまうと、全く意味不明の訳になってしまいます。それに後続の reveal は、動詞としてしか使わない単語です。この reveal こそが文の骨組みを作っているＶ(動詞)で、この英文のＳ(主語)は Frank talks(率直な話し合い)なのです。

これを読み解く鍵となるルールは、

「１つの節に動詞は１つだけ」

という鉄則です。先程も言ったように、Frank から始まる節内には reveal という、動詞としてしか使わない単語が既にあるわけで、talks も動詞ととらえると、「１つの節に動詞が２つ」というルール違反を犯してしまうことになるのです。
それから、reveal が現在時制であり、３単現の s もついていないことから、reveal のＳ(主語)は、複数名詞の可能性が高いですね。reveal より前の語で複数名詞はというと、Frank talks と his parents がありますが、his parents は、前に between という前置詞があり、「前置詞+名詞」の一部です。「前置詞+名詞」は基本的にＳ・Ｏ・Ｃといった文の主要素(骨組み) にはなりません。したがって、 his parents が reveal の主語とは考えられませんね。故に reveal のＳ(主語)は Frank talks だと判断できるわけです(前置詞のついていない名詞は、基本的に文中でＳ・Ｏ・Ｃのいずれかになるもの)。なお、(名詞直後の)「前置詞+名詞」の多くは、直前の名詞を修飾しています。

LESSON BOOK REVIEW　Rule-１　2. を参照せよ。

between ～ parents も Frank talks を修飾し、Frank ～ parents の意味は、「若者とその両親の間(で)の率直な話し合い」と訳せばいいでしょう。

さて、次に reveal の意味ですが、 LESSON BOOK REVIEW　Rule-21　2.(2) にこうあります。

> that節を目的語にとる動詞の主語が『物・事』の場合、その動詞の意味は『示す』となることが多い。

本問も reveal は that節を目的語にとっており、その主語は、Frank talks という「物・事」です。したがって、reveal は「示す」と訳せば良いと分かります。

Frank talks between an adolescent and his parents often reveal
Ⓢ　　Ⓥ

that the adolescent is basically willing
(接)　S　V　基本的には　C
to rely on his parents for protection in many situations
状況
O

問題文全体の意味は以下のようになります。

「若者とその両親の間での率直な話し合いは、若者は基本的には、多くの状況において両親の保護[両親が自分を保護してくれること]をあてにしているということをしばしば示している」

解答としてはこれでもいいのですが、更に(こなれた)良い和訳を作ろうと思えば、この英文が無生物(Frank talks)を主語に持つ、いわゆる無生物主語構文である点に着目します。無生物主語構文の上手い訳し方を知っていますか?　以下がそのポイントです。

> ①主語（無生物）は副詞的に訳出する。具体的には以下のいずれかの意味で和訳するとよい。
>
> 1.原因(理由・手段)…「～なので、～により、～のおかげで」
> 2.条件…「もし～なら」
> 3.譲歩…「～けれど、（たとえ）～としても」

4.時……「～の時」

㊟このうち「原因」「条件」で訳出するとよい場合が最も多い。

②目的語（あるいは「人」）を和訳の主語にして訳出する。

③動詞も直訳するより、和訳の主語に応じて、文脈に則した訳語を適宜(つまり自分の判断で)当てはめる。

㊟中でも「自動詞」的に訳出するといいことが多い。

このルールを用いて先程の訳を、よりこなれた日本語に直してみます。つまり

①主語の Frank talks は「条件」として訳出。
②the adolescent つまり「人」を(和訳の)主語にして訳出。

すると以下のようになります。

「若者とその両親が率直に話し合うならば、若者は基本的には多くの状況において、両親に保護してもらう[両親が自分を保護してくれる]ことをあてにしているのわかる[はっきりする]ことが多い」

動詞の reveal は「分かる[はっきりする]」と意訳し、often の訳は「～が多い」と、文末に回してみました。
なお、protection を「保護してもらう[保護してくれる]」と動詞的に訳出するのも自然な日本語を作るコツと言えるでしょう。「(抽象的な)名詞は『動詞化』『形容詞化』して訳出するといい」というルールもあるのです。これは Frank talks の訳出にも利用しました。

(抽象的な)名詞を動詞化して訳出する和訳演習を、せっかくですから一題やってみましょう。以下の英文を日本語に訳してみてください。

The biggest cause which has made the family dinner lose it's meaning is the addition of the television to this time for interaction.

《語句》interaction:ふれあい、交流

【解答＆解説】

全体構造は以下のようになる。

The biggest cause [which has made the family dinner lose it's meaning]
Ⓢ　　V　　O　C失う　〈O〉意味

is the addition of the television to this time for interaction.
Ⓥ　C

the addition ～ interaction を以下のように動詞化してみると、うまく和訳できるはず。ちなみに add A to B で「ＡをＢに加える」。

We **added** the television to this time for interaction.
=The television **was added** to this time for interaction.

【全訳】

「家族の夕食にその意味を失わせしめた最大の原因は、テレビがこのふれあいのための時間に加わったことである」

2. One issue that researchers have tried to clarify is whether the neural organization for language in bilingual individuals is different from that observed in monolinguals.

《語句》issue:問題
clarify:～を明らかにする
neural organization:神経組織
bilingual individual:二カ国語を話せる人間
monolinguals:一カ国語のみを話す人間
＝monolingual individual
observe:～を観察する

【解答＆解説】

まず文頭の(裸の)名詞の One issue がS(主語)なのは問題ないでしょう。直後の that節は(節頭から数えて２つ目の動詞である)is の手前で終わっており、この is が文のV(動詞)となっています。is の後の whether節はC(補語)になっています。

LESSON BOOK REVIEW Rule-19 を参照せよ。

One issue [that researchers have tried to clarify]
Ⓢ↑ 関・代 S V

is whether～monolinguals.
Ⓥ C

LESSON BOOK REVIEW Rule-８ にこうあります。

Ⓢと Ⓥの間にthat節が挿入されている場合、そのthat節は100パーセントⓈを修飾し、(Ⓢを)説明していると見ていい。

ここから上の図でわかるように、that節は(主語の)One issue を修飾していると見るのです。that が関係代名詞と判断できるのは that節内が(clarify の目的語が欠けた)不完全な文になっているからです。

LESSON BOOK REVIEW Rule-９ を参照せよ。

researchers have tried to clarify

Oが欠けている！

さあ具体的な訳出ですが、本問の whether節は前述の通りＣ(補語)になっているので「～かどうか」と訳せばいいでしょう。

LESSON BOOK REVIEW　Rule-17 を参照せよ。

そうすると大枠の意味は、「研究者達が明らかにしようとしてきた１つの問題とは、～かどうかである」となります。

問題は whether節内の、特に that observed～ の部分でしょう。この observed は過去分詞です(動詞の過去形ではない)。その理由は、that 直前の from という前置詞です。LESSON BOOK REVIEW　Rule-１　2.(1)にこうあります。

前置詞の後には基本的に「名詞の仲間(名詞、代名詞、動名詞など)」がくる。
「Ｓ＋Ｖ」や動詞などは絶対こない。to不定詞もこない。

前置詞 ＋
- ○ 名詞(の仲間)
- × Ｓ+Ｖ～
- × Ｖ～
- × to do[原形]～
- ⋮

つまり that observed で「Ｓ+Ｖ」となる可能性はゼロなのです。となると observed は過去分詞としかみざるを得ません。observed ～ monolinguals は(直前の)that を修飾する形容詞句なのです。それからこの that ですが、英文中の(指示代名詞の)　that は「the+既出の単数名詞」の言い換えで、ここでは the neural organization for language を指していると見ればいいでしょう。

that[=the neural organization for language]　observed in monolinguals

神経組織　言語のための　p.p.　一カ国語のみを話す人間に見られる

そうするとこの部分は「一カ国語しか話せない人間(の中)に見られる言語(のための)神経組織」と訳せます。

whether節全体は「二カ国語を話す人間の言語のための神経組織と、一カ国語しか話せない人間のそれは異なるのかどうか」となります。

問題文全体をまとめるとこのようになります。

「研究者達がこれまで明らかにしようとしてきた一つの問題は、二カ国語を話す人間の言語(のための)神経組織と、一カ国語しか話せない人間のそれは異なるのかどうかということである」

3. Global aging will pose difficult choices to voters and political leaders and place considerable burdens on labor and management.

《語句》global aging:世界的な高齢化　　labor:労働者
voter:有権者　　management:経営者
burden:負担、重荷

【解答＆解説】

この問題の構造を読み解く鍵は、３つの and が何と何を結んでいるのかがきちんと理解できたかという点です。LESSON BOOK REVIEW Rule-12 にこうあります。

> 等位接続詞を見かけたら、まずその等位接続詞の右側から攻めていくといい。
> つまり、まず右側の構造[形]に着目し、それと同じ構造になっている箇所を
> (等位接続詞の)左側に探してみるという手順で読み進めていく。

そうすると以下のような構造分析図を頭に描くことができたことでしょう。

Global aging will
Ⓢ

- **pose** difficult choices to
  Ⓥ 1
  { voters / and / political leaders }

and

- **place** considerable burdens on
  Ⓥ 2
  { labor / and / management } .

１つ目の and は voters と political leaders を、２つ目の and は pose と place を、そして３つ目の and は labor と management をそれぞれ結んでいたのです。
後は pose A to B と place A on B という表現ですが、これについては LESSON BOOK REVIEW Rule-26 5. 7.が使えますね。そうすると pose ～ management までは「困難な選択を有権者と政治指導者にもたらし、重い負担を労働者と経営者に与える」と

(たとえ pcse と place の意味を知らなくても)訳せてしまえます。

㊙terrible は、もしわからなければ、文脈から bad型の形容詞とみなし「大変な」くらいの訳をしても問題ない。LESSON BOOK REVIEW Rule-68 を参照せよ。

今の訳に「世界的な高齢化は～だろう」を付け足せば直訳としては正解なのですが、本問が無生物主語構文であることから、先程学んだ無生物主語構文の上手い訳し方のテクニックを活かして以下のように和訳をまとめるのもいいでしょう。

「世界的な高齢化によって、有権者と政治指導者は困難な選択を迫られ、労働者や経営者は大変な負担を強いられることになるだろう」

㊙上の訳は、主語を「原因」として、そして「人」を和訳の主語にして訳出している。

4. Having no one with whom to compare myself, I had no idea for a long time whether I was better or worse than other children.

《語句》compare:比較する
have no idea = don't know

【解答＆解説】

本問は

Doing～，Ⓢ+Ⓥ…

という構造をしています。これは分詞構文ですね。
LESSON BOOK REVIEW　Rule-58 を参照せよ。

Having～，I　had no idea…．
Ⓢ　Ⓥ

そして分詞構文を作る分詞句が文頭にあった場合、その部分の多くは

①[時]　「～のとき(間)」　「～(しようとする)と」
「～につれて」「～した後」等
②[理由]「～なので」「～により」
③[条件]「もし～なら」
④[譲歩]「～だけれど」「たとえ～としても」

のいずれかで訳せます。
LESSON BOOK REVIEW　Rule-37 2. を参照せよ。

本問は「with以下のような人を誰も持っていなかったので」と、「理由」として訳せばいいでしょう。

ただ問題は with whom to compare myself　です。この「前置詞+関係代名詞(の目的格)+to do[原形]～」の訳し方を学びましょう。実は「前置詞+関係代名詞(の目的格)+to do[原形]～」というのは形容詞用法の不定詞で置き換えてしまうといいのです。
以下がその公式です。

名詞 + 前置詞 + (関係代名詞の)目的格 + to do[剛]〜

⇒ 名詞 + to do[剛]〜+ 前置詞

実際の英文で試してみましょう。

(ex) Everybody needs something for which to live.

上の公式の通りに for which to live を to live for と書き換えます。

→ Everybody needs something to live for.
S V O

形容詞用法の不定詞なので、直前の something にかけて訳します。ちなみに文末の for は「目的」を表します。そうすると和訳は「誰でもみな、なにか生きる目的が必要である」となります。

㊟something to live for の直訳は「それを求めて生きるための何か」。

もう１つだけ例をあげてみましょう。

(ex) What is the best way in which to learn English ?

上の英文も、in which to learn English を to learn English in と書き換えることができます。

→ What is the best way to learn English in ?
C V S

そうすると和訳は「英語を身につける一番よい方法は何ですか」となります。

同じ要領で本問も with whom to compare myself は to compare myself with と書き換え、これを no one にかけて訳せばいいのです。

→ Having no one to compare myself with

そうすると「自分と比較できるような人を誰も持っていなかったので」と訳せます。さて次に主節部分ですが、 for a long time という前置詞句を(　　)でくくるとよかったのです。すると have no idea whether S+V〜 で「〜かどうか分からな

い」という構文が見えてきます。

I had no idea (for a long time)
Ⓢ Ⓥ↑

whether I was { better or 優れている / worse 劣っている } than other boys .
(接) S V
O

問題文全体の訳はこんなふうになります。

「自分と比較できるような人が誰もいなかったので、長いこと私は自分が他の子より(頭が)優れているのか劣っているのかわからなかった」

5. Whatever information there was about other places, though attractive, was considered untrustworthy.

《語句》 attractive:魅力的な
untrustworthy:信頼できない

【解答＆解説】

問題は文頭の Whatever節です。これを読み解くために LESSON BOOK REVIEW Rule-60 を利用します。

①Who[What/Which]+ever節の直後に「Ⓥ」があれば、Who[What/Which]+ever節は主語(Ⓢ)と判断し、「～するものは誰/何/どちらでも(みな)」と訳す。要するに最後を「も(みな)」でまとめてしまえばいい。

②Who[What/Which]+ever節の後ろに「Ⓢ+Ⓥ(主節)」があれば、Who[What/Which 節は副詞節と判断する。訳し方は「たとえ誰/何/どちらが(を)～しても」。要するに最初と最後を「たとえ～しても」でまとめてしまえばいい。

本問は①のパターンでした。以下が構造分析図です。

Whatever information there was about other places
S V
Ⓢ

(,though attractive,) was considered untrustworthy.
魅力的な Ⓥ C 信用できない

本問は、元々 was の後ろにあった information が Whatever とセットで節頭に飛び出した構造。

そうすると文頭の Whatever節は「他の場所についての情報はどんなものでも(みな)」と訳せます。

though attractive は though の直後に the information was が省略されています。
LESSON BOOK REVIEW Rule-53 を参照せよ。

ここは「たとえ(それが)魅力的であったとしても」となります。

was considered untrustworthy の considered は consider O C(OをCとみなす)の受動態。したがって「信頼できないと見なされた」となります。

そうすると問題文全体はこんなふうになります。

「他の場所についての情報はどんなものでも(みな)、たとえ(それが)魅力的であったとしても、信頼できないと見なされた」

最後にせっかくですから consider の語法についてまとめておきましょう。

①[consider O(名詞・動名詞・疑問詞節など)]「Oについて(よく)考える、熟考する」
(ex) You should consider the problem before coming to a conclusion
結論を下す前にその問題をよく考えるべきだ
I am considering going to France.
私はフランスに行こうかと考えている
You should carefully consider what to do.
何をすべきか注意深く考えねばならない

②[consider O(名詞・that節など)]「Oを考慮に入れる、Oを思いやる」
(ex) The jury considered his state of mind.
陪審は彼の精神状態を考慮に入れた
We always have to consider the feelings of others.
いつも自分以外の人の気持ちを思いやらなくてはならない

③[consider O(that節)]「Oだと思う」
(ex) She considers that she is happy.
彼女は自分を幸福だと思っている

④[consider O(名) (to be/ as) C(形・名・分)]「OをCとみなす」
(ex) We consider him (to be) intelligent.
私達は彼は利口だと思っている
＝He is considered (to be) intelligent.

要するに consider はＳＶＯかＳＶＯＣのどちらかの語法しかありません。「ＳＶＯ」のときは「考える、考慮する」、「ＳＶＯＣ」のときは「OをCとみなす」と訳せばいいのです。

後者の意味の場合、consider A as[to be] B となることもある。

最後に consider の派生的な用法についてもまとめておきましょう。

①considerable(形):「かなりの、相当な」
②considerate (形) :「思いやりがある」
③All things considered,:「全てのことを考慮に入れるならば」
④considering :

この considering の用法は分詞構文とみなすこともできる。

(1)「～を考えると、～のわりには、～にもかかわらず」
(ex) He looks young, considering his age.
彼は年の割には若く見える

(2)「～であることを考えれば、～であるわりには」
(ex) Considering (that) she has no experience, she did quite well.
未経験にしては、彼女はかなりよくやった

(3)[文尾で]「すべてを考慮すれば、そのわりには」
(ex) It's not bad, considering. そのことを考えれば悪くはない
=all things[circumstances] considered

《課外授業７》

「動詞+to do[原形]～」型の訳出法。

皆さんは不定詞(to do[原形]～)を目的語に取る動詞の覚え方を知っていますか？
不定詞の最大の特徴は、

①「未来志向」
②「積極性」

です。したがってそのような性格を持つ不定詞を後ろに(目的語として)取る動詞には、未来に向かって何かをしようという、これまた「未来志向」「積極性」が感じられる動詞が多いのです。その(つまり「未来志向」「積極性」型の動詞の)３大代表選手が、「希望(～したい)」「意図(～するつもり)」「決心(～することに決める)」を表す動詞です。確かに、たとえば「大学に行きたい」「大学に行くつもりだ」「大学に行くことに決めた」といった場合、どれもまだ大学には実際には「行っていない」わけで、「行く」のはこれから先、つまり「未来」の話(こと)ですよね。そしてこれらの動詞には「積極的意志・願望」が感じられます。このような簡単な例からも、これらが「未来志向」「積極性」型の動詞であることがわかります。
では具体的に(不定詞を目的語にとる)「希望」「意図」「決心」を表す動詞の例 をあげてみましょう。

①希望
hope「望む」 desire「したい」 wish「したい」 long「したい」 want「したい」 beg「懇願する」
care「[否定文・疑問文で]したい」 ask「頼む」 claim「主張する」 demand「要求する」

②意図
plan「計画する」 expect「つもりだ」 fail「しない・できない」 vote「(投票で)支持する」
offer「申し出る」 pretend「ふりをする」 attempt「しようとする」 venture「あえて～する」
aim「つもりだ」 agree「同意する」 consent「同意する」 refuse「拒絶する」
vow「誓う」 undertake「ひき受ける」 swear「誓う」 guarantee「保証する」
promise「約束する」 seek「しようと努める」

③決心
decide「決心する」 determine「決心する」 resolve「決心する」 hesitate「ためらう」
choose「決める」

④イディオム・その他

can afford to V[原形]～「～する余裕がある」
manage to V[原形]～　①「どうにか～する・できる」②「(まんまと)～するはめになる」
tend to V[原形]～　「～しがちだ」「～する傾向にある」
learn to V[原形]～　「～する[できる]ようになる」

つまり結論として、
後ろに不定詞を目的語をとっている動詞の型(つまり「他動詞+to V[原形]～」)を見 つけたら、

他動詞+to

部分は「希望」「意図」「決心」(といった「未来志向」「積極性」)のいずれかの意味をV[原形]～に付け加える、一種の助動詞だとみなすといいのです。
「助動詞」というとらえ方がまだしっくり来ない人は以下の英文を見てください。

(ex) The meeting will be successful. その会議は成功するだろう

この英文中の助動詞 will は The meeting is successful(会議は成功する)に「確実にそうなるだろう」という一種の「予測・判断」を付け加える働きをしています。
ではこの英文を見てください。

(ex) He longed to return home. 彼はしきりに家に帰りたがった

この英文中の longed to は、 He returns home(彼は家に帰る)に「しきりにそうしたがった」という「(主語の)希望」を付け加える働きをしています。
もう一例見てみましょう。

(ex) He attempted to settle the dispute. 彼はその争いを解決しようとした

この英文中の attempted to は、He settles the dispute(彼はその争いを解決する)に「そうしようとした[試みた]」という「(主語の)意図」を付け加える働きをしています。
このように V[原形]～ にある種の意味を付け加えるという点で、「動詞+to」は will, can, may といった助動詞とその働きが同じなのです。

実際 ought to(～すべきだ)、have to(～しなければならない・～するに違いない)、used to(昔よく～したものだ)、be going to(～するだろう) などは、文

法書でも助動詞として紹介されていますね。

ただし上記で紹介したもののうち、④のイディオム的なものや refuse to, hesitate to, fail to のような「拒絶・否定・不行動」を表すものには注意したい。
あるいは stop to do[原形]～(～するために立ち止まる)のように、不定詞が目的語以外である動詞の直後に付く場合は、上記のルールはあてはまらない。

6. Not until one reaches one's sixties does one truly appreciate the pleasure of doing nothing.

《語句》appreciate:～の価値がわかる

【解答＆解説】

本問を読み解くには LESSON BOOK REVIEW Rule-38 を理解している必要があります。まずはこのルールを確認してからこれからの説明を読んでみてください。

ここでは Not until で始まる否定の副詞節が文頭に飛び出した形になっています。そして上記のルールにあったように、このような英文ではまず

「疑問文と同じ語順になっている箇所」がその英文の主節だと判断するとよい。元々の主節がどこから始まっているのかが分かれば、それよりも左側は「(文頭に移動した)否定の副詞(句・節)」だと、簡単にこれまた判断できる。

のでした。そこで本文中からそのような語順になっている箇所を探すと does one truly appreciate が見つかります。こうして Not until は sixties までを導いていたことがわかるのです。

Not until one reaches one's sixties
S　V～に達する　O 60代
否定の副詞節

does one truly appreciate the pleasure of doing nothing.
Ⓢ　Ⓥ　楽しみO

not until～ は「～して初めて」と訳すといいでしょう。

one は「一般の人」を表しています。このような「一般の人」を表す one, we, you が文中に現れた場合の対処法は２通りあります。

①「我々・私達」「人」「自ら・自分」などと訳す。
② 訳さない。

実際の英文の訳出ではどちらが多いかというと、「訳さない」方がすっきりとしたいい訳になることが多いのです。本問の one も訳さなくて十分です(もちろん「我々」といった訳をあててもいいが)。
そうすると問題文全体の訳はこんなふうになります。

「60代に達して初めて、何もしないという楽しみの価値が本当にわかるようになる」

A of doing～ という構造は「～するというＡ」と訳すといい。LESSON BOOK REVIEW Rule-61 を参照せよ。

7. It is human wisdom and courage that enable us to devise ways of overcoming the limitations placed on us by environment.

《語句》 human wisdom:人知　　devise:考案する、考え出す
courage:勇気　　limitation:限界
overcome:～を克服する、乗り越える

【解答＆解説】

この英文は It is ～ that … という形が見て取れますね。It is ～ that … の構文は、それが「仮主語構文」なのか「強調構文」なのかの見極めがとても大切になります。その見極め法を紹介しましょう。

①It is[was] と that の間に「形容詞・分詞」や「副詞(句・節)」がある場合。
It is[was] と that の間に「形容詞」や「分詞」があったら、それは仮主語構文だとみて間違いありません。It is[was] と that の間に「副詞(の仲間)」があったらそれは強調構文だとみて間違いありません。

(1) It is[was] 形容詞・分詞 that 完全な文 ・☞ 仮主語構文

(2) It is[was] 副詞(句・節) that 完全な文 ・☞ 強調構文

副詞(の仲間)とは、「副詞一語」「前置詞+名詞」「接続詞+S+V」。
以下は全て強調構文。

(ex) It was recently that the accident happened.
It was yesterday that I finished this work.
It was at nine thirty that I came home.
It was since I was ill that I couldn't come here.

ただし「前置詞＋名詞」が形容詞句になっている場合は例外。仮主語構文とみなし「前置詞＋名詞」がC(補語)になっているとみる。
そのような代表例としては「of+抽象名詞」や「beyond+範囲・限界を表す名詞」など。特に「of+抽象名詞」は形容詞化するというルールは頻出。
以下はすべて仮主語構文(that節が真主語)。

(ex) It is of importance that you should study hard.
=important
君が一所懸命勉強することが大事だ

It is beyond belief that he was killed in the accident.
=unbelievable
彼がその事故で死んだということが信じられない

It was beyond a joke that you said such a thing in public.
人前でそんなことを言ったのは冗談の域を超えている

②It is[was] と that の間に「名詞(句・節)」がある場合。
It is[was] と that の間に「名詞(の仲間)」があった場合、that の後ろの英文が「完全な文」なら仮主語構文、「不完全な文」なら強調構文とみていいでしょう。

(1) It is[was] 名詞 that 完全な文 ・ ☜ 仮主語構文

(2) It is[was] 名詞 that 不完全な文 ・ ☜ 強調構文

あと「注意すべきポイント」も、いくつか示しておきましょう。

①「不完全な文」とは、S(主語)・O(目的語)・C(補語)のどれか１つが欠けた文のこと。

②It is～thatの構文で、thatの後ろが「不完全な文」であれば、それは強調構文と見てほぼ間違いない。

もちろん文頭のItが直前の単数名詞や直前の内容を指す代名詞、その後のthatが直前の名詞にかかる関係代名詞という英文も中にはあるの

で、先頭のItが文中で役割を持っているかどうかを確認する必要はある。つまりそのItが「それ」と訳せるなら強調構文ではない。逆にそのItが訳がつかない（文中での役割を持っていない）のなら強調構文ということになる。下の英文は強調構文のように見えるが、Itは「それ」と訳せ、またthatは単なる関係代名詞で、強調構文ではない。

(ex) It rained suddenly. It was a problem that we had been worried about.
関・代

突然雨が降ってきた。それは私たちが心配をしていた問題だった

③強調構文だとわかったら、It is と that をカッコでくくってしまうといい。すると文の骨組みが浮かび上がってくる。

(ex) It was Tom that broke the vase. ⇒ (It was) Tom (that) broke the vase.
S V O

④強調したい語(句)が「人」の場合は、that の代わりに who, whom が使われることもある。

(ex) It is Nancy whom Jack loves. ジャックが好きなのはナンシーです

⑤また強調したい語(句)が「物(事)」の場合は、that の代わりに which が使われることもある。

(ex) It is the dog which bit me yesterday. 昨日私を噛んだのはその犬です
※bite - bit - bitten

㊟場合によっては(副詞句を強調した強調構文において)that の代わりに関係副詞が使われることもある。

(ex) It was at that time when I first met him.
私が彼に最初に出会ったのはその時でした

⑥強調構文が下線部訳問題になっていた場合、うまく和訳するポイントは、強調されている語句を和訳の最後にもってくることである。
ただし、以下のように強調されている語句が「only+語(句・節)」などの場合は、「～してはじめて(ようやく)…した」と、前から普通に訳せばいい。

(ex) It was only through their help that we coped with the crisis.
彼らの助けによってようやく私たちその危機を乗り切ることができた

本問は、「注意すべきポイント」のまさに②のパターンですね。It is ～ that の構文であり、that の後ろには(主語の欠けた)不完全な文が来ています。そうです。この英文は強調構文です。そこで It is と that を取り外してみると、以下のような

構造が見えてくるはずです。

human wisdom and courage enable us to devise ways
人知 Ⓢ 勇気 Ⓥ O C考案する 〈O〉 ↑

of overcoming the limitations placed on us by environment.
~を克服する ↑限界 p.p. 環境

enable O(人) to do[原形]～ は「Oが～するのを可能にする」ですが、これをたとえ知らなくても LESSON BOOK REVIEW Rule-23 2. には、知覚・思考以外の動詞が作るＳＶＯＣ構文は、

「Ｓが原因となって(Sのおかげで・せいで/Sによって)、結果としてＯはＣする」

と訳せばいいと書いてあります。本問も「蓄積された人知によって(結果として)我々は～の方法を devise することができる」と全体をまとめれば、合格点の答案が出来上がります。

さて次に placed ですが、これは「置かれる[た]」という意味の過去分詞です(動詞の過去形ではない)。その理由は

「その英文の動詞の数－１＝その英文の（従位）接続詞・関係詞・疑問詞の数」

というルールがあるからです。この英文には関係代名詞として that が１つあるのみなので

その英文の動詞の数 － １ ＝ １

つまりこの英文には動詞は２つしかあってはならないことになります。既に is, enables という動詞(にしかなれない語)がある以上、placed はもう動詞とは考えられないのです(残る可能性は過去分詞のみ)。

placed ～ environment の具体的な訳出ですが、この placed は place A on B が元の形(ここではその受け身)。ならば LESSON BOOK REVIEW Rule-26 5. を用いて(「ＡをＢに与える」型の受け身なので)「環境によって我々に与えられた」と訳せば良いでしょう。

もちろん、その前に前置詞の of がある。前置詞の後には S+V はこないので、placed が動詞にはなり得ない、と簡単に考えてもいい。

あとは devise の意味ですが、とりあえずそれ以外をまとめてみましょう。こんなふうになるはずです。

「人間の知恵と勇気によって、(結果として)我々は、環境から与えられた限界を克服する方法を devise することができる」

最後に devise の訳出ですが、 LESSON BOOK REVIEW Rule-21 1. を利用します。そこにはこんなことが書かれていました。

ＳＶＯ構文の意味の基本は「Ｓが(は)Ｏに対して働きかけ(行為・影響・注目など)を行う」。

別の言い方をすれば、「OにまでSの働きかけ(行為・影響・注目等)が(直接的に・全面的に)及ぶ」ということ。

ＳＶＯ構文に関しては、目的語によっては、(その目的語に対して働きかけうる)動詞の種類、意味を、文脈・状況・常識から類推したり限定できてしまうものもある。類推する際の考え方(手がかり)として、日常生活の基本動作(「言う」「思う」「見る」「わかる」「作る」「壊す」「する[行う]」「出す」「取る」「触れる」等)のどれかを当てはめてみるといいことが多い、ということも覚えておくといい。

本問の devise も後ろに ways を目的語に取るＳＶＯ型。そこでここでは「作る」くらいになるだろうと予想し、「～の方法を作る → ～の方法を編み出す・考え出す」といった訳を当てはめてみれば良いのです(実際 devise は「考え出す」「発明する」という意味)。
この方法も、(辞書が使えない)試験本番で未知語に出会ったときの類推法としてとても役立ちます。ぜひこれから実践で使ってみてくださいネ。

それではまとめとして全体を和訳してみますが、強調構文の上手い訳し方として、

強調されている語句を和訳の最後にもってくる。

と先程説明されていましたので、そのようにまとめてみましょう。

「私達が環境によってもたらされた(与えられた)限界を克服する方法を考え出すことができるのは、まさに人間の知恵と勇気のおかげなのである」

《課外授業８》

「その英文の動詞の数－１＝その英文の(従位)接続詞・関係詞・疑問詞の数」

このルールについて補足しておかなければならないことがあります。
それはこのルールには例外が３つあるということです。具体的には以下になります。

(1) 疑問詞が先頭についた疑問文。

① When can you do that? いつそれをやれますか

② When did you decide where you're going for your vacation?
休暇に行くつもりの場所をいつ決めたのですか

上の英文で(1)は動詞１つと疑問詞１つ、(2)は動詞２つと疑問詞２つで、上記のルールに当てはまらない。

(2) 接続詞・関係詞が省略される場合。

① The man I love is you. 私が好きな男性はあなたです

② I think he is right. 彼は正しいと思います

①の英文は動詞が２つ(loveとis)、②の英文も動詞が２つ(thinkとis)だが、両英文とも接続詞・関係詞・疑問詞を含んでいない。その理由は①の英文の場合、関係代名詞の whom が man の後ろに、②の英文の場合、接続詞の that が think の後ろに省略されているから。ただし省略されているだけで先のルールがあてはまっていないわけではない。

(3) (副詞節を導く)従位接続詞の後ろで「主語+be動詞」が省略される場合。
これについては LESSON BOOK REVIEW Rule-53 を参照せよ。

では一つ英文を解いてみましょう。以下の英文を訳してみてください。

The most important reason changing nature's secret code is controversial is that the DNA in food is changed.

《語句》secret code:遺伝子コード
controversial:議論を呼ぶ(巻き起こす)、意見の分かれる

【解説】

①この英文には動詞が３つ(is / is / is)ありますが、that という接続詞が１つあるのみです。本来なら ３－１＝２ ですから、あともう１つ「(従位)接続詞」「関係詞」「疑問詞」のどれかがなくてはならないはずです。

②実はこの英文の reason と changing の間には関係詞(why)が省略されているのです。全体の構造と全訳は以下のようになります。

The most important reason
Ⓢ

[(why) changing nature's secret code is controversial]

is
Ⓥ

that the DNA in food is changed
(接) S V
C

.

【解答】

「自然界の遺伝子コードを変えることがその意見の分かれるものである最も重要な理由は、食物中のＤＮＡを変えてしまうことになるということだ」

8. It is not what you read that counts but how you read it.

【解答＆解説】

この英文も It is ～ that … 型で、that の後ろに(主語の欠けた)不完全な文が来ていますから、強調構文だという理解はすぐにできたはずですが、問題は以下の２点です。

① counts の訳出。
② but以下の訳出。

まず count ですが、これは「重要だ」という意味の自動詞です。matter や be important で言い換えることができます。これについては知らなきゃおしまいで、知識の問題です。

次に but 以下ですが、この but はおなじみの「しかし」と訳す but ではありません。実はこの but は、前半の not と結びついて not A but B となる「Ａではなくて Ｂ」という決まり文句的な表現の一部だったのです(PartⅡ19ページからを参照せよ)。つまり本問は、本来なら

→ It is not what you read but how you read it that counts .

とすべきところが、これではあまりに頭でっかちなので、but ～ it が文末に回された英文なのです。ただ not A but B を強調する場合、

① It is not A but B that V～.
② It is not A that V～ but B.

どちらも可能性としてはありうるので、公式としてこれらは覚えておきましょう(本問は②のタイプ)。それから not A but B のイコール表現に B not A があります。これを使った場合も、以下の２パターンが考えられます。

① It is B not A that V～.
② It is B that V～ not A.

公式だけではイメージがわかない人もいるでしょうから簡単な例文をあげておきまし

ょう。

(ex) It is not him but you that I love. 私が愛しているのは彼ではなくあなたです
=It is not him that I love but you.
=It is you not him that I love.
=It is you that I love not him.

さてここまでわかれば、本問の和訳はたやすいですね。以下のようになるでしょう。

「重要なのは何を読むかでなく、どう読むかだ」

最後に多義語の覚え方についてアドバイスをしておきましょう。さきほど「重要だ」という count については知らなきゃおしまいだと言いましたが、count は他にもおなじみの「計算する」をはじめ、「考慮に入れる」「重要だ」「頼る」などいろんな意味がある、いわゆる多義語です。この多義語をどうすれば最も効率的に頭に整理することができるか。それは『核』のイメージを用いることです。『核』のイメージとは、その語の一番根底にあるイメージのことを言います。count の場合、その『核』のイメージは「計算に入れる[入っている]」です。

(ex) Five people, counting her entered the room.
彼女を入れて５人がその部屋に入った
counting her は「彼女を計算に入れて」ということ。

おなじみの「計算する」という count もここから来ています。
そして「計算に入っている」から「～と考えられている[見なされている]」、「計算に入れる」から「～を考慮する」「～と考える[見なす]」という意味が生まれました。
日本語でも「考えに入れておく」という意味で「計算に入れておく」と言ったりするので類推しやすいはず。

(ex) The book counts as his masterpiece.
その本は彼の傑作とみなされている
I counted him among our friends. 私は彼を仲間の１人とみなした
I count it better to advise him. 彼に忠告する方がよいと思う
it は to advise him を指す仮目的語。
She is counted as their leader. 彼女は彼らの指導者と考えられている

またその「考慮に入れる」から「考慮に値する」「価値がある」「重要である」という意味が生まれました。
日本語でも「ものの数にも入らない」と言えば、「たいして重要ではない」ということを意味するので類推しやすいはず。

(ex) Every vote counts. １票でも大切だ
What counts is your efforts. 大切なのは努力だ
Money counts for something[nothing]. お金は重要である[ない]
Seconds count. １秒を争う

count on A (for B) で「(Bのことで)Aに頼る」という用法がありますが、これは「Aの上で(Aを根拠・拠り所として)計算をする → Aを頼りにする」となったのです。

(ex) You can count on me. 僕を頼りにしていいよ
Don't count on others for help. 他人の援助を当てにしてはいけない
My husband is always counting on me to help him.
=My husband is always counting on me for help.
夫はいつも私の助けを当てにしてばかりいる
count on A to do[原形]～で「Aが～するのを当てにする(頼る、期待する)」という語法。

どうでしょうか。count の意味を、辞書にあるように単に(なんの相互の関連づけもなく)箇条書き的に丸暗記するのと、このように一つの『核』のイメージから全ての意味を関連づけて覚えるのとでは、その労力に雲泥の差があることは容易に理解できるはずです。そして実際受験で設問として問われやすいのはこの多義語なのです。

9. Nowhere does this effort to be alike go on more strenuously than in schools in Japan.

《語句》 strenuously:激しく
alike:互いによく似た、同じような
go on:起こる、行われる

【解答＆解説】

$$\text{否定語} + \left\{ \begin{array}{c} \text{as[so]+原級+as} \\ \\ \text{比較級+than} \end{array} \right\} + \text{A・}$$

このような構文は、最上級の代用表現で「Aほど～なものはない」と訳すのが基本です。本問は「否定語 ＝ Nowhere」で、この Nowhere という副詞が文頭に置かれたために、直後の主節部分が疑問文と同じ語順になってしまっています。「日本の学校におけるほど～なものはない」が全体の骨組みになります。

LESSON BOOK REVIEW Rule-38 を参照せよ。

本問の主語になっているのは this effort to be alike で、ここは「(他人と)同じようになろうとするこのような努力」と訳せばいいでしょう。そうすると問題文全体の訳はこんなふうになります。

「日本の学校におけるほど、他人と同じようになろうとするこのような努力が激しく行われているところはない」

10. ①Why do Japanese people have great difficulties in learning foreign languages?
②One of the factors, ironically enough, is the highly advanced state of Japanese culture.

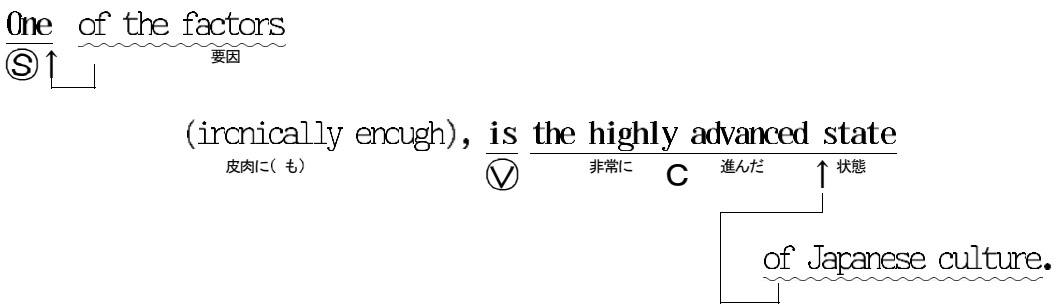
《語句》 have difficulty (in) doing～:～するのに苦労する
factor:要因
ironically:皮肉的に
advanced:進んだ
state:状態

【解答＆解説】

①
ここは語句さえわかれば問題なかったでしょう。こんな訳になります。

「どうして日本人は外国語を修得するのに大変苦労しているのだろうか」

②
カンマとカンマの間を(　　)でくくれば、骨組みは以下のようになりますね。



そうすると骨組み部分は「その要因の(うちの)一つは、日本文化の非常に進んだ状態である」となります。

問題は ircnically encugh ですね。「非常に皮肉的に」といった直訳ではなんともさまになりません。実はこんな考え方があるのです。

文頭で主節とはカンマで区切られた副詞や、修飾している語句が一見よくわか

らないような副詞は、文全体にかかっているのではないか、と判断する。そしてこれらの副詞のうまい訳出法は、それを形容詞化し文全体を仮主語構文にしてしまうといい。

このルールを用いて ironically enough を ironical enough と形容詞化し、②を仮主語構文で書き直してみます。

⇒ It is ironical enough that one of the factors is the highly advanced state of Japanese culture.
(形)

そうするとこんなふうに訳せます。

「その要因のうちの一つは、日本文化の非常に進んだ状態である(という)のは大変皮肉なことである」

【全訳】
「どうして日本人は外国語を修得するのに大変苦労しているのだろうか。その要因のうちの一つは、日本文化の非常に進んだ状態である(という)のは大変皮肉なことである」

《課外授業９》

狙われるのはやはり多義語。

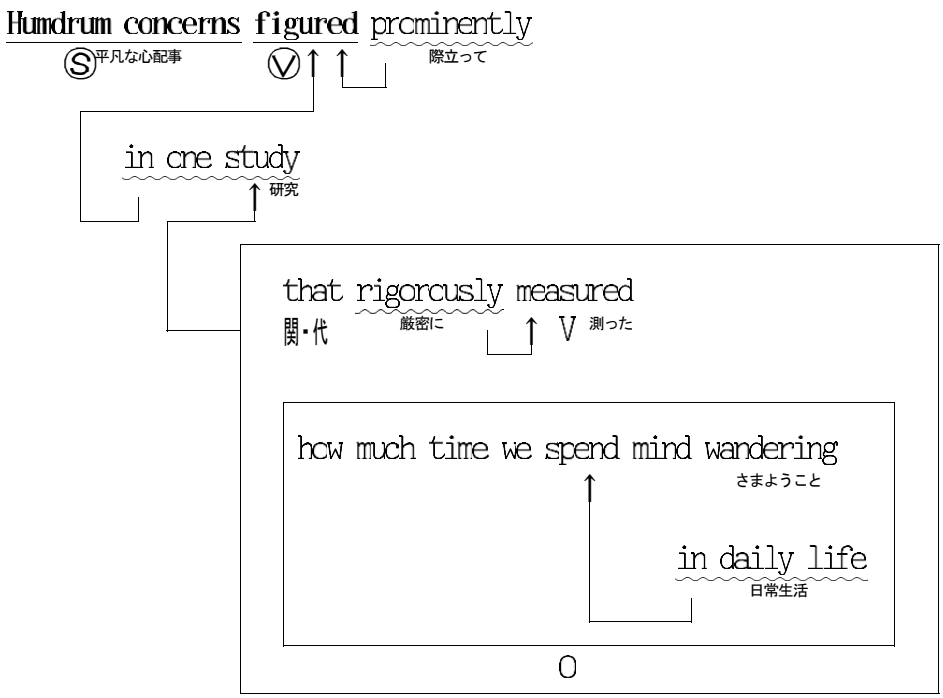
このような英文が下線部和訳問題として名古屋大学で出題されました。

Humdrum concerns figured prominently in one study that rigorously measured how much time we spend mind wandering in daily life.

《語句》

humdrum:平凡な
concern:心配事
prominently:際立って、著しく
rigorously:厳密に、厳しく
measure:測る
spend A doing～:～することにAを使う
wander:さまよう

まず構造分析図を示してみましょう。



このように、構造はシンプルな第一文型（ＳＶ）です。that は関係代名詞で、that節全体が one study を修飾しています。that節は「日常生活の中でどれくらいの時間を心がさまようことに使うかを厳密に測った」となります。

㊟mind は wandering という動名詞の意味上の主語。「心がさまようこ

と」と訳す。LESSON BOOK REVIEW Rule-35 を参照せよ。

そうすると本文全体は、「日常生活の中でどれくらいの時間を心がさまようことに使うかを厳密に測ったある研究において、平凡な心配事が際立って figure していた」となります。
残る問題は figure の訳出ですね。読者のみなさんは figure という単語をご存じですか? ざっとこれだけの意味があります。

1.名詞のfigure
①「(人の)姿、容姿、(からだの)スタイル」
②[通例形容詞を伴って]「…な人物」
③「(絵画・彫刻などの)人物像、動物の像」
④「図形、図解、さし絵」
⑤「(ダンス・スケートの)フィギュア」
⑥「数字、(数の)けた、(数で表わした)額」

2.動詞のfigure
①「～だと思う、判断する」
②「計算する」
③[figure cut A]「(1)Aを理解する (2)Aを解決する (3)Aを算出する」
④「目立つ」

先程8.の解説で「狙われるのは多義語だ」と言いましたが、実際こうして多義語の figure が国立二次試験の和訳問題で問われているのです。
で実は、上記の英文の figured は「目立っていた」という意味でした。
このように「狙われるのは多義語だ」というのは本当だとわかっても、じゃあこれをどうやって覚えたらいいのかということについて、受験業界で誰もこれまでその方法を提示してきませんでした。これまでの英語学習(の指導法)は、これら(多義語)の意味をとにかく「覚えなさい」というものでした。ボクから言わせれば、そのような指導は無為無策であり、受験生の努力に丸投げでしかありません。
正しい覚え方は、やはり「『核』のイメージ」を利用することなのです。
figure の『核』のイメージは「(あいまいだった)輪郭をはっきりさせる[がはっきりする]」です。
「～を計算する、合計する」「～を(数字・図・絵で)表す」「図解する」「描く」といった意味が動詞の figure にはありますが、これらは全て「～を数字・図・絵などで、その輪郭[全体像]をはっきりさせる」ということ

なのです。

(ex) I figured up a total. 合計を出した

また「～だと考える、結論する、決定する」「～を…だと思う」「～を理解する」 「～を想像する、思い描く」という意味もありますが、これは「～を頭の中でその輪郭[全体像]をはっきりさせる」ということです。

(ex) What do you figure will happen? 何が起こると思いますか
We figured it (to be) the best plan.
私達はそれが最善の計画だと結論した
I can't figure him. 彼を理解できない
The teacher figured that Jeff was asleep.
先生はジェフが眠っていると思った

自動詞の場合、「計算が合う(をする)」「(話が)わけがわかる」「現れる」「目立つ」等の意味がありますが、これは「(あいまいだった)輪郭がはっきりする」ということです。

(ex) She figured as a guest star in that program.
彼女はその番組にゲストスターとして出演した
That[It] figures. それは当然だ、思ったとおりだ
「あいまいだった輪郭がはっきりした」ということ。
Her name figures in history. 彼女の名は歴史上有名だ
「歴史の中で彼女の名前ははっきりとしている(目立っている)」ということ。

それから figure cut で「～を理解する」という表現がありますが、これは「出現の cut」がfigure にくっついただけのこと。
「出現の cut」については LESSON BOOK REVIEW 63～64ページ を参照せよ。

「完全に～の輪郭をはっきりさせる[浮かび上がらせる] → ～を理解する」となったわけです。

(ex) I can't figure him out. 彼を理解できない
Can you figure out what to do with this?
これをどうしたらよいかわかりますか

figure は名詞としても用いられますが、その場合は「輪郭がはっきりし

たもの[をはっきりとさせたもの]」というのが『核』のイメージになります。(名詞の figure の) 「(統計上の)数字」「(数で表される)額、値段」「(数字の)けた」「図形、図」「計算」という意味の場合、数字や図(形)というのは、売り上げ、価値、大きさ、形等をわかりやすく「その輪郭[形・内容]をはっきりさせたもの」であり、計算というのは「輪郭[内容]をはっきりさせること」と言えますね。

(ex) unemployment figures 失業者数
We bought a house at a low figure. 家を安い値段で買った
the figure 8 数字の8
a large figure 大きな数
I did figures. 計算をしてみた
The skater drew several figures on the ice.
スケーターは氷上にいくかの図形[模様]を描いた
ちなみに figure skating という名前は、元は氷上に正確に図形を描けるかを競うものだったことに由来する。
She is good at figures. 彼女は計算が得意だ

更に名詞の figure には「(人の)姿、人影」「(物の)形」「(体の)格好、スタイル」という意味がありますが、これらは「(ある人・物の)はっきりとした輪郭」ということです。

(ex) A dark figure was following her. 黒い人影が彼女を尾行していた
She is trying to keep her slender figure.
彼女はほっそりしたスタイルをくずさないように努力している

また「重要人物、名士」「(〇〇な)人物」という意味がありますが、重要人物というのは、周りから目立つ(つまり輪郭がはっきりしている)人物ですね。

(ex) a great figure in history 歴史上の偉人
He is now a public figure. 彼は今や有名人です

どうでしょうか。このように、その単語の持っている一番根っこのイメージをつかむことにより、表面上に現れた結果としての意味を一気に理解してしまうというのができるのです。繰り返しになりますが、受験業界・高校英語では、このような教え方、捉えさせ方はこれまで皆無でした。
ccunt や figure 以外にも、狙われる多義語というのは、数多くあります。

そういった頻出の多義語を一堂に集め、『核』のイメージから明快に説明している書籍があります。それは「語感で覚える重要英単語」（青灯社刊）です。ぜひ本書を読み終えたあと、本番を見据えて同書に手を伸ばしてみられることをおすすめします。これまでの英語学習の常識を覆す高速多義語＆イディオム習得と、ネイティブの英語感覚の習得に大きな威力を発揮してくれる一冊となるでしょう。

「語感で覚える重要英単語」には、他にもたとえば get across、get around、get away、get back、get by、get down、get in、get off といったイディオム(他にも take+α、keep+α、put+α…多数ある)を丸暗記せずに、一つのイメージで一気にとらえて覚えてしまう方法なども載せられている。また前置詞についても『核』のイメージから体系的にわかりやすく身につく説明がなされている(前置詞のマスターは英語感覚の向上に欠かせないとよく言われるが、それをスムーズに納得いく説明で可能にしている)。
また語源(接頭辞・語幹・接尾辞)についても載っており、語源だけで収録語数は1000を越えるが、そこに書かれたルールを活用できるようになれば、その数倍～十倍超の語彙を高速習得できるだろう。